

# 老いとつきあう 楽しい知恵を探して

村上紀美子  
(医療ジャーナリスト)

## デンマークの「ペタゴギック」柔軟な哲学

# 人と人かかわりのレッスン

歳々々々、人同じからず。年を重ねるにつれ自分でできなくなることが増えますし、困っている人がいたら気持ちよく手助けしたいと思えます。ただし「主人公である本人」と「手助けする援助者」のかかわりは、一方が強すぎれば、もう一方は我慢するばかりとなり、なかなかデリケートな問題です。

今回は、ごつした本人と援助者のかかわりについて、デンマークの「ペタゴギック」をヒントに考えます。

「若者を導く」という意味のギリシャ語、ドイツの幼児教育から始まりました。ペタゴギックを学んだ専門職の人「ペタゴ」は幼児教育や小学校、知的障害者支援などで活躍し、近年は認知症ケアや精神障害者ケア分野でもこの手法が取り入れられています。

ペタゴの教育者、ベント・ラーセンさんが、分かりやすく説明してくれました。「例えば、同じ両親のきょうだいや同じクラスで育つ子どもたちは、みな同じですか？ それぞれの性格や行動傾向は違いますね。親や教師はその違いを分かり、個性に合った対応を自然に行っているでしょ？」

ペタゴの教育者、ベント・ラーセンさんが、分かりやすく説明してくれました。「例えば、どの人も同じようになることを期待するかわり方と、ペタゴのかかわり方は随分違います。

まず援助者が本人に歩み寄り、話をよく聞き、本人の行動パターンや内面までを理解します。このとき本人の言葉だけではなく表情や仕草、行動など、五感のアンテナを立てて、本当に何を求めているのかを察知し確かめながら、本人に合わせて手伝います。「人はそれぞれ違う」ことを大切にして、相手を尊重してかかわります。表面に表れた

ペタゴはデンマークの国家資格ですが、その教育の内容や試験がまた「ペタゴ一流」です。国の試験官が各大学に赴き、学生のレポートをあらかじめ読んだうえで学生に口頭試問を実施して可否を判定します。不合格の場合も、不足している部分をもう一度学び、試験に再挑戦できます。これを繰り返すことで、合格者のレベルがさがるのです。

国の試験官を務めるラーセンさんは、学生のレポートを見ると、自分の不得意なことや失敗に気付いているか▽なぜ失敗したかを自分で究明できるか▽を重視しています。「完全な人間なんていない」と、わかまえておくことが大切なのです。そして自分で気付けない学生には、口頭試問のときに「自分の足りない点について気付けないのはなぜか」と尋ねます。学生によって納得するスタイルは違うので、その人物に合ったスタイルで伝えます。

### 今回の楽しい知恵

手伝い、サポート、援助、ケア……。人が人を助けるかわりにも練習が必要。「手助け上手」になると、自分の順番が来たとき「助けられ上手」になれる。

ペタゴギックとは、人が成長し社会生活を身に付けていくときの哲学、そして教育やケアの手法。一人一人違う人間性・個性を捉え抜いて、それに合った対応をするという、いわば「究極の個別ケア」で

ラーセンさんが現地で市に提案して採用され、30年間手塚にかけたオトゴップ市知的障害者通所施設。通所者一人一人に合った対応のため、木工で鳥の巣箱、アクセサリ、絵やインテリア小物などを作るたきさんの活動が用意され、すべて販売されている。



販売されている通所者の製品。①アクセサリなどの②絵やドライフラワーなど③インテリア用品④アンデルセンや童話の絵

次回は宮瀬純嗣さんの「新・真健康論」です。

ペタゴギックの柔軟な哲学と優しい手法を意識することは、実際に資格を取らなくても、日常生活での周囲の人とのかかわりの中で、手助けをしたり、されたりする時に生かせると思います。

言動の裏側まで見抜く力や、手伝うアイデアをたくさん持っていることも大切です。